2011 年度報告書（研究員）

氏　名	平田知久
職　位	研究員（グローバル COE）

研究概要

2011 年度は、インターネットカフェに関する 1 本の査読付き英語研究ノート（論文 1）と、近年研究に着手した「テレパシー」の社会思想史に関する 1 本の日本語論文（論文 2）を完成させ、日本のインターネットカフェの社会史を描写するための基礎考察として、1 回の学会報告を行った。

論文 1 では、日本のインターネットカフェで生活を行わざるを得ない人々（いわゆるネットカフェ難民）に焦点を当て、彼ら／彼女が置かれた経済的・社会的劣位の状態をデータを利用しながら明らかにしつつ、「なぜ彼ら／彼女らは互いに協力することができないのか」という疑問について、日本のインターネットカフェで暗黙裡のうちに共有される「他人に迷惑をかけない限り何かをすることができる」という規範が、彼ら／彼女らを非常に強く拘束しているのではないか、という論点を提起した。この論点については、「移民」を主題とした英語書籍の 1 つの chapter の執筆においても問う予定である。

論文 2 では、「テレパシー」と呼ばれるコミュニケーションの理解を巡る J. ラカンと J. デリダの対立が、彼らの「手紙はつねに宛先に届く／つねに宛先に届かないことがありうる」というテーゼの対立に帰着するコミュニケーションの理解を巡る対立を解読する鍵となりうることを示そうとした。今年度は分量の都合で、主に J. ラカンのテレパシー論を扱うに留まったが、次号にてデリダのテレパシー論が掲載される予定となっている。

報告 1 では、日本のインターネットカフェはいかなる系譜で現在のかたちになったのか、という問題について、主に当時の新聞記事を用いた分析により、それが大まかに 3 つの時期（1995～2000 年、2001～2005 年、2006～2010 年）に分類できることを示し、諸外国のインターネットカフェではむしろ日常的光景である「空間を共有しながらの利用」という様態が、個人ブースの登場によって見られなくなり、逆に個人ブースの矛盾するような正負（落ち着ける／怖い）の側面が、インターネットカフェの特質となったことを示した。

業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）

I. 論文

1. Hirata, T. (2011). “Being Quiet in Internet Cafes: Private Booths and the Isolation of Net Cafe Nanmin,” Journal of Socio-Informatics, The Japanese Association for Social Informatics and The Japan Society for Socio-Information Studies, Vol. 4, No. 1, pp. 41-8.

2. 平田知久. (2012).「E. A. ポーと二つのテレパシーの交錯――二人のジャックによせて(1)」『Becoming』No. 29, pp. 66-98.

II. 報告

1. 平田知久, (2011).「「ネットカフェ」をめぐる言説の変遷とモノの変遷 1995-2010」関西社会学会第 62 回大会, 甲南女子大学.